

「のだ」文の用法と教科書分析及び習得過程について

大場 理恵子

(92. 6. 13発表)

I はじめに

モダリティ表現のなかの「説明的陳述」(ハズダ、ワケダ、モノダ、ノダ等)は、日本語学習者にとって、習得が困難であるといわれる。その中でも「のだ」文は、多くの表現性を含み得る可能性を持ち、その習得は難易度の高いものであることが予想される。本稿では、「のだ」文の用法についての考察および「のだ」文の初級教科書に於ける取り扱われ方、そして「のだ」文習得の困難点を調査した結果を報告する。

II 「のだ」の機能と用法について

「のだ」文は、「XはYのだ」という題述文の後半のみを表現するものである。(寺村(1984))特徴的なのは、Xは、言語化されたものでも、言語化されていない状況といったものでも可能である点である。小金丸(1990)はいわゆる「説明」等といわれる、XとYの結びつきをしめす「のだ」を「ムードの『のだ』」とし、そのほかに「スコープの『のだ』」と名付けた、「文を名詞句化し、『述語によって示されることがらの成立』以外の部分を否定・疑問・断定等のフォーカスにする」機能を設定した。この立場をとり、機能を2種に区分し、さらにモダリティーに着目して、「ムードの『のだ』」の用法を表1のように区分する。

<表1>

I スコープの「のだ」	… a
ex. 私は終戦の年に生まれたのではない。	
II ムードの「のだ」	
II-1. 話者と聞き手の共有する前提のあるもの	

① 疑問表現

- i 前提状況Xの補足説明を聞き手に求めるもの <疑問詞疑問文>
… b

ex. どうして休んだんですか。

- ii 前提状況Xに対する話者の理解Yが適切であるかを聞き手に問うもの <真偽疑問文>
… c

ex. (京都の名産があるのをみて) 京都へ行ったんですか。

② 前提となる文、状況の補足説明をするもの

- i YがXの原因・理由・根拠となるもの(前提状況Xの前提を説明するもの)
… d

ex. 「どうして休んだんですか。」「頭が痛かったんです。」

- ii YがXという根拠にもとづく判断やXの実情説明となるもの(前提状況Xの帰結を説明するもの)
… e

ex. 熱がある。風邪をひいたのだ。

II-2. 話者と聞き手の共有する前提のないもの

- ① 聞き手の取り込み、情報不均衡の是正、情報の送りこみの姿勢を表すもの(情報提供)
… f

ex. 「昨日海へ行ったんだ。」「へえ、どうだった。」

- ② 話し手の判断で、聞き手・話し手の望ましい(望ましくない)行動を述べるもの(当為)
… g

ex. 「あのときやめるんだった。」

「さっさと行くんだ。」

III 教科書分析

次に初級教科書において、以上に区分した用法がどういった順序で提示されるのか、また導入されない用法は何かを調査分析した。(表2)

分析対象は ①『日本語I』(国際学友会日本語学校) ②『日本語初歩』(国際交流基金日本語国際センター) ③『An Introduction to Modern Japanese』(水谷修・水谷信子) ④『文化初級日本語I・II』(文化外国語専門学校) ⑤『新日本語の基礎I・II』(AOTS) ⑥『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I・II』(AJALT)、参考として機能シラバス中級教科書⑦『日本語表現文型中級I・II』(筑波大学日本語教育研究会)である。

提示順は、b, e は早めに提示され、次にc, d, f、提示が遅いもの、もしくは導入されないものはa, g となっている。

bの用法はすべての初級教科書で早めに提示されるが、反語的含意を持つ文(ex. 「何言っているんだ。」「何度失敗するんだ。」)は導入されない。eの用法も同様に早めの提示が見られるが、ディスコースで話題となっているも

の補足説明や、自分の状況説明(ex. 「どうしたんですか」「頭が痛いんです。」)としての用例はあるが、他者の言語化されていない状況に対して判断する(ex. 「友人の髪形が変わったのに気付いて）あっ、髪を切ったんだ。）ような用法はない。

<表2> a～gの記号は表1の記号に対応

教科書	初出	総課	順序	1	2	3	未導入	
①	2 2	3 6	課	2 2	2 4	2 6	a, g	
			用法	b, e	d, f	c		
②	2 4	3 4	課	2 4	2 7	3 1	a, g	
			用法	c, e	b	d, f		
③	1 2	3 0	課	1 2	1 3	2 0	g	
			用法	b, c, d, e	f	a		
④	1 6	3 7	課	1 6	2 6		g	
			用法	b, c, d, e, f	a			
⑤	2 6	5 0	課	2 6	2 8		a, g	
			用法	b, d, e, f	c			
⑥	4 1 *	7 0 *	課	4 1 *	4 2 *	4 3 *	a, g	
			用法	b, c, d	f	e		
⑦	用法	a	b	c	d	e	f	g
	課	20	14	—	19	9	8・16	—

* は、Iと通番換算した数字

IV 習得について

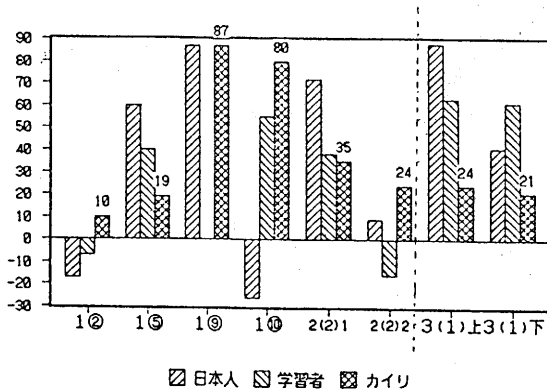
次に初級教科書の教授項目と、中級学習者の「のだ」文習得状況とがどう関わっているのかを調査した。

調査は、当該「のだ」文が正用であるかどうかを判定させる文法判定テストを、日本語学習暦6か月以上の中上級学習者82名、日本語母語話者47名を対象に行った。設問1および2は、その文を正用文と判定したら○、誤用文と

判定したら×、どちらともいえない場合は△をつけてもらった。また、設問3は、二つの文のどちらが適切かを判定させた。表3～6の指数は、設問1および設問2の場合は（正用文と判定した人の割合）マイナス（誤用文と判定した人の割合）、設問3は正用文と判定した人の割合である。日本語母語話と中上級学習者との指数の乖離（かいり）度に着目して分析した。

(1) 疑問詞疑問文の「のだ」について（b用法）

<表3>



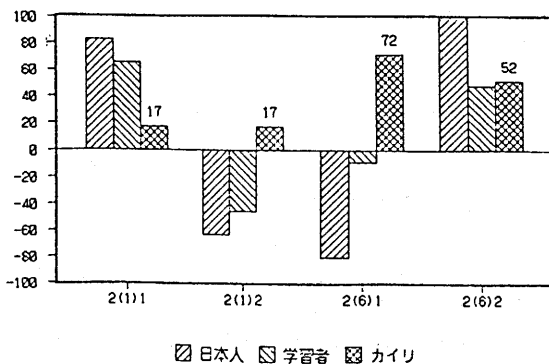
- 1② どうして日本に来ましたか。
- 1⑤ どうして学校を休んだんですか。
- 1⑨ 何度同じことを言ったらわかるんですか。
- 1⑩ 何度同じことを言ったらわかりますか。
- 2(2) (学校の窓が割れている。先生が言う。)
- 1 誰が割ったんですか。
- 2 誰が割りましたか。
- 3(1) 「Bさん、これ、お土産です。どうぞ」
- 上「ありがとう。どこへ行ったんですか。」
- 下「ありがとう。どこへ行きましたか。」

1②、1⑤は「どうして」疑問文で、乖離は小さい。一方1⑨1⑩は、反語的含意のもので、非常に大きな乖離を見せた。3(1)は前提のある疑問文で、着目に値するのは、学習者は設問の上と下の指数の差が無い点である。

(2) 真偽疑問文の「のだ」について（c用法）

<表4>

(2) 真偽疑問文の「のだ」の習得について

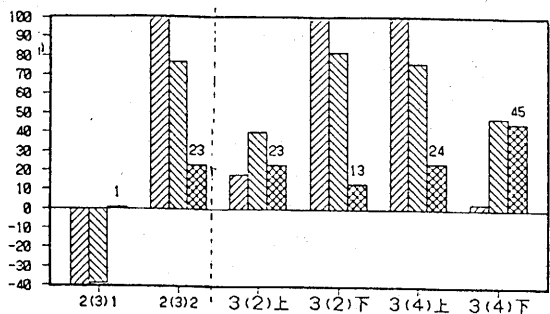


- 2(1) (AはBに先週本を貸した。AがBに言う。)
- 1 こんにちは、ああ、あの本読みましたか。
- 2 こんにちは、ああ、あの本読んだんですか。
- 2(6) (結婚したいと思っていた人は既婚者だと聞いて)
- 1 結婚していますか。
- 2 結婚しているんですか。

前提のない真偽疑問文に「のだ」文を使えないことは、2(1)の乖離が少ないことより、理解度が高いと考えられる。一方、2(6)のような真偽疑問文によって自問納得する用法の指数は乖離が大きい。

(3)「のだ」の必要性の低い文について

<表 5 >



■ 日本人 □ 学習者 ▨ カイル

2(3) (「昨日は何を食べましたか。」に答えて)

- 1 お寿司を食べたんです。
- 2 お寿司を食べました。

3(2)「Bさん、あの白い建物は何ですか。」

- 上「病院なんです。」
下「病院です。」

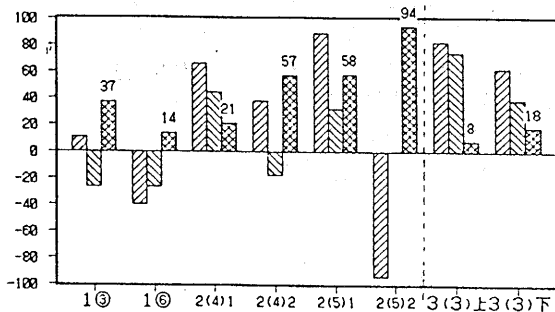
3(4)「私はコーヒーにするけど、Bさん、何がいい。」

- 上「ジュースがいいです。」
下「ジュースがいいんです。」

設問 2-(3)は動詞述語文、3-(2)は名詞述語文、3-(4)は形容詞述語文で、いずれも前提となる状況、情報提供の送り込み姿勢の必要性が想定しにくく、とくに「のだ」文使用の必要性の低いものである。特徴的なのは3-(4)において下「ジュースがいいんです」の乖離が大きいことである。「のだ」文の用法を「強調」ととらえ、話し手の希望を強く述べるときにも「のだ」を使用してしまふ過剰般化によるものか、もしくは主節の前提文において、「本を借りたんですが…」というようなeの用法の過剰般化が予想される。

(4) その他

<表 6 >



■ 日本人 □ 学習者 ▨ カイル

1③ 私は1970年に生まれたんではない。

1⑥ 彼は日本で育たなかった。

2(4) (水泳のコーチが言う。)

- 1 今日は3km泳げ。
- 2 今日は3km泳ぐんだ。

2(5) (Aが髪を切ったのを見て)

- 1 あっ、髪を切ったんだ。
- 2 あっ、髪を切りました。

3(3)「Bさん、日曜日はどうでした。」

上「映画を見たんですけど、つまらなかったから途中で帰ってきましたよ。」

下「映画を見ましたけど、つまらなかったから途中で帰ってきましたよ。」

設問2(4)当為(命令)表現において乖離が大きい。また、設問2(5)の前提状況の判断の「のだ」は、前提状況(この場合は言語化されていない)に対する、話し手の判断をあらわすものだが、乖離が大きくなっている。

以上、本調査においては、一般に初級教科書で導入された用法の、日本人と学習者との乖離度が低く、一般に初級教科書で導入されない用法における乖離度が高くなった。「のだ」文は、よく、「滞日期間の長い学習者は自然と習得するようになる」という話を聞くが、果して正しい習得が自然になされるのかどうか、少なくとも本調査に限って言えば疑問がある。今後、母語別・学習段階別等より細かく学習者層を区分した対象に文法判定調査のみでなく、発話調査等を加えて行い、「のだ」文の習得過程を明らかにしたいと考えている。

<参考文献>

- 三上章 (1953) 『現代語法序説』(刀江出版)
- 佐治圭三 (1972) 「「のだ」と「のだ」-形式名詞と準体助詞-(その二)」『日本語・日本文化』第3号
- 久野暁 (1973) 『日本文法研究』(大修館書店)
- 山口佳也 (1975) 「「のだ」の文について」『論集日本語研究7』(有精堂)
- 田中望 (1980) 「日常言語における”説明”について」『日本語と日本語教育』第8号
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(くろしお出版)
- 小金丸春美(1990)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』9-8
- 多門靖容 (1990) 「談話行動調査から談話文法を見直す」(日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究・平成元年度科学研究費補助金研究報告(6A))
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』(和泉選書)
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティーの文法』(くろしお出版)
- 日本語教育学会(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』(凡人社)
- 井上 優 (1991) 「受信情報の疑問文」津田日本語ソサエティ「言語理論と日本語教育の相互活性化」予稿集

(お茶大日本言語文化専攻修士2年)